

令和元年6月12日現在

機関番号：34316

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02647

研究課題名(和文) 大学教育を支えるアカデミック・ジャパニーズの習得過程の分析とそのルーブリック化

研究課題名(英文) Analysis of Acquisition Process of Academic and Japanese Supporting University Education and its Lubrik

研究代表者

木下 謙朗 (KINOSHITA, Noriaki)

龍谷大学・経済学部・准教授

研究者番号：00587149

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、アカデミック・ジャパニーズ教育とその隣接する領域(初年次教育、リメディアル教育、高大連携等)における実践研究のアーカイブスの構築を目指し、100編のアカデミック・ジャパニーズ実践報告を抽出し、アーカイブスを構築した。
さらに、構築したアーカイブスを利用し、アカデミック・ジャパニーズスキルの習得指標となるルーブリックの評価観点要素の抽出を行った(特にライティングと読解)。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アカデミック・ジャパニーズ実践のアーカイブス構築、読解、ライティングにおける評価観点等を公開することで、世界中にいるアカデミック・ジャパニーズ実践者がこれらを利用し、多様化している日本語学習の評価に応用できると考えられる。さらに、アカデミック・ジャパニーズ教育と隣接領域にある実践(初年次教育、高大連携等)においても寄与できると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to create an archive Research Reports of Academic Japanese education and practical research in related areas. In addition, using those archives, we extracted evaluative Rubrics, which serve as indicators for acquiring Academic Japanese skills.

研究分野：日本語教育学

キーワード：アカデミック・ジャパニーズ アーカイブス ルーブリック 評価観点 ライティング 読解

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

(1) アカデミック・ジャパニーズの現状

日本語教育学会内のテーマ別研究会「アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会」ではアカデミック・ジャパニーズ（以後AJ）の理念の構築と教育方法論の研究を規約に掲げ、2004年度の発足以来、大きな視点で「ことばの教育」としてのAJを捉えようと試みてきた。しかし、日本語学習者が多様化し、さらに、AJの理念を利用した実践が多岐にわたってきており、加えて日本語母語話者を含む教育実践の成果が極めて少ないことから、AJ理念の再構築と、実践研究の蓄積が急務となっている。また、日本語の習得研究は盛んに行われているにも関わらず、AJに対する習得研究はきわめて少ない。

(2) 大学初年次教育の現状

2000年代から若者の意識変化、大学進学率の上昇や入試形態の多様化を背景にした学力の低下等を理由に、大学初年次教育の重要性が注目され（石堂2007）、その後、約10年を経て爆発的に普及を遂げた。山田（2013）が初年次教育として位置づけているものの中で、「レポート・論文の書き方」「論理的思考や問題発見解決能力」「学内のリソースの使い方」「ディスカッション・プレゼンテーションの方法」「グループワークの体験」等はAJとして研究されてきた知見が役立つ。しかし、AJと大学初年次教育の連携はなく、共通した実践も共有されていないのが現状である。

(3) リメディアル教育の現状

少子化に加え、大学入試科目の削減・推薦入試・AO入試など多様な選抜方式により、大学入学者の学力レベルが保証されなくなった結果、学生間の学力格差拡大などがみられるようになった（小野・馬場2012）。日本におけるリメディアル教育の一般的なものは、①理数科目、②英語、③日本語、であるが、日本語教育の事例は現段階では比較的少ない（小野・馬場2012）。リメディアル教育研究において報告される日本語関係のものは、ライティング教育が多いが、リメディアル教育としてAJの考え方と方法は、議論と検討が今後必要である。

(4) 高大連携教育の現状

高校全入時代、そして大学進学ユニバーサル化により、高校と大学の関係は進学構造的には「選抜」から「接続」へと変化したと荒井（2005）は指摘しているが、その教育内容は接続されていないことから、現在、連携へ向けた具体的な形も模索され始めている。一方で、日本語に関する部分、つまり、高校における国語教育と大学での勉学に必要な言語能力（AJ）との関係性について十分検討されておらず、連携においても課題が残されている。

2. 研究の目的

本研究は、日本語教育だけでなく他分野（初年次教育、リメディアル教育等）へ向けたAJ教育の知見や理論の共有化と、AJの習得過程の解明を目指す研究である。目的達成のためには、AJ教育実践の方法論や教材、教案、また理念が体系的に分類されたアーカイブスの構築が必要である。構築したアーカイブスを発信することで、AJ教育や日本語教育だけでなく、国語教育やキャリア教育やグローバル人材育成に寄与することも目的の一つである。さらに、AJの習得を探るために、アーカイブスで抽出した評価観点を利用してルーブリック案を提示し、公表する。

3. 研究の方法

(1) アカデミック・ジャパニーズ教育と隣接する領域における実践研究のアーカイブス構築

AJを大学での学びを支える日本語力と捉えつつ、L1の初年次・リメディアル教育や高大連携、留学生センターや留学生別科を含む予備教育も内在されるものとする立場をとる。対象とするAJ実践報告は『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』27編、『言語文化教育研究』13編、『リテラシーズ』1編、『言語文化と日本語教育』1編、『大学教育学会誌』4編、『日本リメディアル教育学会誌』4編、『WEB版日本語教育実践研究フォーラム報告』6編、『専門日本語教育研究』8編、『日本語教育』4編、高大連携にかかわる紀要6編、留学生センター・留学生別科紀要10編、大学の紀要16編の計100編を任意で抽出した。各誌とも入手可能な中で相対的に新しいAJ実践が報告されているものを選択し、1編を2名以上で実践報告の記述と分析項目との関連性が高いと読み手が判断した語句を抽出し、KJ法的に内容の近いもの同士を近くに並べ、ナンバリングした。ナンバリングした語句は「日本十進分類法」を参考にし、表1のように大項目（3桁目）、中項目（2桁目）、小項目（1桁目）に分類した。

表1 AJ実践報告から抽出したキーワードの項目別分類

	100番台	200番台	300番台	400番台	500番台	600番台
大項目	学習者	科目	科目等の目的	プロセス・プロダクト手法	関係性	対学習者への評価方法
中項目	機関・環境	クラスサイズ	志向性	志向性	対象者	形態・評価者
小項目	レベル	ジャンル	重視するプロセス	活動	学びの方向性	評価観点

(2) AJ スキルの習得指標となるルーブリックの構築

大学教育におけるジェネリック・スキルの評価に関する動向について、ルーブリックを使用した35の実践・取り組みを分析し、評価観点の傾向を分析した。さらに、構築したルーブリックを利用し、また、2018年3月に開催した「読解ルーブリック作成ワークショップ」において得られた評価観点をを用いて、読解における評価観点、ライティングにおける評価観点要素の選定を行った。

4. 研究成果

(1) アカデミック・ジャパニーズ教育と隣接する領域における実践研究のアーカイブス構築

100編のAJ実践から抽出した実践の特徴を表すキーワード（対象、手法、目的、評価、概念、理論的背景の傾向）をそれぞれの実践にタグ付けし、データベースソフトウェアであるMicrosoft Access 2016を利用して、「キーワード検索」と「フリーワード検索」ができるアーカイブスを構築した。アーカイブスを利用してルーブリックの評価観点となる要素の抽出のほか、大学教育におけるジェネリック・スキルの評価に関する動向について、ルーブリックを使用した35の実践・取り組みを分析したところ、学士力（文部科学省2008）に含まれるジェネリック・スキルがバランスよく組み込まれていた評価観点を示しているルーブリックは1例も観察されなかったことが明らかになった。

(2) AJ スキルの習得指標となるルーブリックの構築

ルーブリックについては、上記のアーカイブスを利用して読解における評価観点、ライティングにおける評価観点要素の抽出を行った。

読解に関しては、『AJジャーナル』等12編の読解実践論文から評価観点を集積し、さらに読解ルーブリック作成ワークショップを開催した際に提案された評価観点を加え分類した。その結果、「読解した文章構造を意識した産出」、「読むことに対する自律的な態度」、「読解内容に対するクリティカルな態度」、「協働的な活動への参加」といった評価観点を四つに分類し、それぞれ下位項目に具体的な評価観点の提案を行った。

ライティングの評価観点に関しては、複数のルーブリックを作成し、形成的評価・診断的評価として用いることを提案した。その中で、ライティングのプロセスとして捉えた場合、構想（課題の吟味、批判的思考）、検索、引用、構成（論理性）、構文（表現選択やコロケーションの適切性等）、書式等の点検の各段階において評価観点を抽出し、「相互・自己評価」に使いやすい「採点指針ルーブリック」の作成を提案した。

その他、ルーブリックの理解度と有効性に対する評価を学習者と教師にアンケート調査およびインタビュー調査を実施し、その関係性についても報告を行った。そこでは、レポートを書くプロセスの中でピアリーディングを行うことで、多くの学生が理解・傾聴にもとづく率直な指摘によって多角的な視点を獲得していたことが確認された。とくに、質的内容分析により、ピアリーディングが新たな人間関係構築や意欲の向上、メタ認知、自己理解、他者参照にもつながっていることを明らかにした。

構築したアーカイブスを利用し、AJ 実践で利用されている AJ 理念の範囲を改めて明らかにした。さらに、グローバル化、IT 化時代で将来の変化を予測することが困難な時代を前に、自らの力で障害を生き抜く力を培っていくために必要とされる「新しい能力」との範囲を比較検討し、AJ 理念に含まれていない三つの視点（専門的技術・スキル、自律的・主体的、キャリア）を解明し、報告を行った。

また、アーカイブスを利用し、大学で第二言語として日本語を学ぶ留学生対象の AJ 実践報告と初年次教育など第一言語としての AJ 実践報告を対象に、実践の目的、手法や評価の構成要素、理論的背景について分析した。その結果、目的・育成する能力・目指す学習者像には、①全人的な教育（主体性・人間性の形成、人材など）、②広義の能力形成（コミュニケーション能力、批判的思考力、問題意識など）、③言語技能（スピーキング・作文能力など）の3群に分類できた。これらの結果から、自己・相互評価手法の共有、評価観点の多角化の必要性を述べ、言語的な観点に加え「論理性、知識、批判的思考」、「自立性（自己モニタリング力）、内省」「協働学習における貢献度」などの評価観点を考慮し、多角的な視点で評価するべきだと提案を行った。

AJ 実践のアーカイブス構築、読解、ライティングにおける評価観点等を公開することで、AJ 実践者がこれらを利用し、多様化している日本語学習の評価に応用できると考えられる。さらに、AJ 教育と隣接領域にある実践（初年次教育、高大連携等）においても寄与できると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 5 件）

- ① 木下謙朗、アカデミック・ジャパニーズ理念と大学に求められる〈新しい能力〉の接点、

水谷信子記念日本語教育論集、第2号、査読有、(印刷中)

- ② トンプソン美恵子・大島弥生・小笠恵美子・大場理恵子・河野礼実、大学初年次日本語表現科目におけるピア・ラーニングの促進・阻害要因、大学教育学会誌、第40巻第2号、査読有 pp. 54-63、2019
- ③ 木下謙朗、批判的思考の育成を目指した日本語授業の試み、水谷信子記念日本語教育論集、第1号、査読有、pp. 95-102、2018
- ④ 伊藤奈津美・安田励子・山同丹々子、ルーブリックに対する学習者の理解度と有効性の関係—学習者と教師の評価から—、比較生活文化研究、査読有、25、pp. 33-42、2018
- ⑤ 木下謙朗、大学教育におけるジェネリック・スキルの評価に関する研究、龍谷紀要、査読無、第39巻第1号、pp. 47-64、2017

[学会発表] (計 19 件)

- ① 木下謙朗、留学生に対するアカデミック・ジャパニーズを考える、第4回龍谷大学 JEP&別科日本語科目実践報告会、2019
- ② 木下謙朗・大島弥生・小笠恵美子・佐藤正則・伊藤奈津美・武一美・三代純平、アカデミック・ジャパニーズ実践報告のデータベース化に向けて、第47回アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会、2019
- ③ 木下謙朗、質問作りを利用した授業による質問態度の変化、第25回大学教育研究フォーラム、2019
- ④ 小笠恵美子・伊藤奈津美、アカデミック・ジャパニーズのための読解における評価観点案、第25回大学教育研究フォーラム、2019
- ⑤ 大島弥生・大場理恵子・木下謙朗・小笠恵美子・佐藤正則・伊藤奈津美・武一美・三代純平、ライティング課題のルーブリックのための評価観点の要素抽出の試み、第25回大学教育研究フォーラム、2019
- ⑥ 武一美、複言語で育つ高校生/大学生をめぐる高大接続—アカデミック・ジャパニーズから考える—、第44回 アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会、2018
- ⑦ 木下謙朗、質問作りから始める批判的思考力育成の試み、第24回大学教育研究フォーラム、2018
- ⑧ 木下謙朗、<新しい能力>とアカデミック・ジャパニーズ実践報告に表れる記述の分析—学習目的・育成する能力・目指す学習者像の構成要素—、(企画発表「アカデミック・ジャパニーズのこれまでとこれから」)、韓国日語教育学会・言語文化教育研究会共同開催第34回冬季国際学術大会、2018
- ⑨ 門倉正美、教養教育としてのアカデミック・ジャパニーズ—再考—(企画発表「アカデミック・ジャパニーズのこれまでとこれから」)、韓国日語教育学会・言語文化教育研究会共同開催第34回冬季国際学術大会、2018
- ⑩ 佐藤正則、アカデミック・ジャパニーズにおける実践報告(企画発表「アカデミック・ジャパニーズのこれまでとこれから」)、韓国日語教育学会・言語文化教育研究会共同開催第34回冬季国際学術大会、2018
- ⑪ 木下謙朗、アカデミック・ジャパニーズ実践におけるパフォーマンス評価の動向、第41回 アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会、2017
- ⑫ 大島弥生・大場理恵子・小笠恵美子・トンプソン美恵子・河野礼実、初年次「日本語表現法」科目修了時のアンケート調査結果に見る変化—学生はレポート作成の何を「楽しさ・つまずき・必要」と感じていたのか—、第23回大学教育研究フォーラム、2017
- ⑬ 門倉正美・佐々木あや・佐々木良造・吉川達、みんなで<多読>を考えよう—やる気を引き出す日本語インプットを目指す—、2017年度第1回支部集会【九州・沖縄支部】、2017

- ⑭ 安田励子・山同丹々子・伊藤奈津美・高橋雅子、学習者のループリックの理解度と有効性に対する評価—レポート作成における教師の役割—、2017年度日本語教育学会秋季大会、2017
- ⑮ 門倉正美、クリティカルとは何か—メディア・リテラシーと哲学の文脈で考える—、言語文化教育研究学会 第4回研究集会、2017
- ⑯ 小笠恵美子・木下謙朗・大島弥生・武一美・佐藤正則・三代純平、アカデミック・ジャパニーズ実践におけるループリックによる評価の可能性をめぐる考察—実践者インタビューを通じて—、第38回アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会、2016
- ⑰ 木下謙朗・大島弥生・佐藤正則・武一美・三代純平・門倉正美・小笠恵美子、アカデミック・ジャパニーズ研究報告に関するアーカイブ構築をめざしたタグ付けの試行、第38回アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会、2016
- ⑱ 小笠恵美子・大島弥生・伊藤奈津美・武一美・佐藤正則・三代純平・木下謙朗、L1、L2 学習者を対象としたアカデミック・ジャパニーズの実践報告に見られる記述の分析—学習目的・手法・評価の構成要素—、2016年度日本語教育学会研究集会第7回、2016
- ⑲ 木下謙朗・大島弥生・小笠恵美子・武一美・佐藤正則、アカデミック・ジャパニーズ実践の記述に表れる構成概念—実践報告のメタ分析を通じて—、日本語教育学会 2015年度秋季大会、2015

〔図書〕(計3件)

- ① 吉川達・門倉正美・佐々木良造、どんどん読める！日本語ショートストーリーズ vol.1、2017、135
- ② 吉川達・門倉正美・佐々木良造、どんどん読める！日本語ショートストーリーズ vol.2、2017、134
- ③ 吉川達・門倉正美・佐々木良造、どんどん読める！日本語ショートストーリーズ vol.3、2017、138

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：大島 弥生

ローマ字氏名：OSHIMA, Yayoi

所属研究機関名：東京海洋大学

部局名：学術研究院

職名：教授

研究者番号(8桁)：90293092

研究分担者氏名：佐藤 正則

ローマ字氏名：SATO, Masanori

所属研究機関名：山野美容芸術短期大学

部局名：その他部局

職名：講師

研究者番号(8桁)：50647964

研究分担者氏名：小笠 恵美子

ローマ字氏名：OGASA, Emiko

所属研究機関名：昭和音楽大学

部局名：音楽部

職名：講師

研究者番号（8桁）：10827702

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：武 一美

ローマ字氏名：TAKE, Kazumi

研究協力者氏名：伊藤 奈津美

ローマ字氏名：ITO, Natsumi

研究協力者氏名：三代 純平

ローマ字氏名：MIYO Jumpei

研究協力者氏名：門倉 正美

ローマ字氏名：KADOKURA, Masami

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。